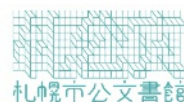


上田家の足跡

～特定重要公文書「上田善七資料」を中心に～



上田善七 肖像

上田善七と兄・万平は明治4年に、現在の岩手県盛岡市にあたる地域から、札幌円山の地に家族とともに来道、入植しました。それ以後、万平・善七兄弟は農業や地域の発展に尽くしながら、藻岩村村会議員など様々な公職を歴任しました。また善七の長男・守蔵は教育者として活躍しました。

本展示では、当館が所蔵する特定重要公文書「上田善七資料」を中心として、その他の当館所蔵資料も用いながら、上田善七とその兄・子など、上田家の人々による、様々な活動を跡づけていきます。

※本展示では、資料中の旧字旧仮名遣いを引用する際に、新字新仮名遣いに置き換える場合があります。

第1章 上田家の来道と発展

第1章では、上田万平・善七兄弟とその家族が円山の地へ入植してから、善七の結婚、善七家の分家独立、善七の士族編入といった生活の基礎を確立していく様子を、文書資料などをもとに描きます。

また、万平・善七兄弟が開拓に尽力した結果、二人は村で有数の農地所有者となったことを、明治37年時点の円山村の地図やそこに記された土地所有者一覧をもとに、地図やグラフなどで確認します。

さらに、善七の父母から孫までの4世代にわたる家系図から、上田家が大きく発展していった様子を見ていきます。

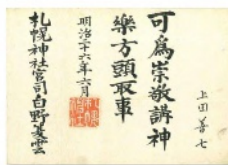


第2章 地域の発展と上田家

第2章では、明治期から昭和戦前期までの、円山地域の発展に関わる様々な事業と上田家の関わりについて、「上田善七資料」やその他当館所蔵資料をもとに描きます。

年表でまとめているように、万平・善七兄弟だけでなく、その子どもたちも、様々な公職や要職に就き、地域の発展を支えていました。

上田家に関わった多くの事業のうち、本展示では、朝市・消防組・貯蓄組合・札幌神社・物産共進会・凶作で生活に困った人々のための寄付活動について見ていきます。



第3章 上田家と教育

第3章では、上田家の人々と学校教育の関わりについて紹介します。円山の地に初めての教育所(後の小学校)設立や、学校運営資金のための学田地の獲得と経営、また学務委員や保護者会などでも、万平・善七兄弟をはじめ上田家の人々が活躍しました。

また、善七の長男守蔵は、北海道師範学校・広島高等師範学校を卒業し、留萌尋常高等小学校や札幌高等女学校(現在の札幌北高の前身)など道内の学校に赴任し、訓導から校長まで勤め上げました。

本章ではこのような、上田家と学校運営や学校教育との関わりについて見ていきます。



第4章 上田家の社会貢献活動

上田家の人々は、公職に就くだけでなく、様々な社会貢献活動に関わっていました。

教育所設立など様々な事業への寄付や各種社会貢献団体への所属とそこでの活動を通じて、上田家の人々は、円山地域だけにとどまらず、また内容も広範囲に、その活動の足跡を残しています。

そうした活動の結果、特に万平・善七兄弟は地域の人々から顕彰され、胸像や石碑が建立されました。その一部は現在でも見ることができます。

第4章ではこのような、社会貢献活動に関する上田家の人々の足跡を見ていきます。



札幌市役所1階ロビー展

2026年2月2日(月)～2月6日(金)

1 上田家の来道と発展

1-2 上田家の発展

本パネルでは、万平家・善七家が円山村で開拓に力を注いだ結果、明治37年時点では村内でも有数の農地所有者となった様子を、地図資料や「上田善七資料」をもとに見ていきます。また、万平・善七の父母から善七の

孫までの4代にわたる上田家の家系図から、上田家が大きく発展していった様子を見ていきます。

明治37年の円山村の土地所有状況

明治3年、庚午三の村(後の円山村)の当初入植は30戸90人でしたが、明治34年には194戸880人に大きく発展しました。

右の地図は明治29年の北海道による調査を元に、明治37年に更正したものです。地図上に地番等が記されているほか、右上と左上の表に各土地の地目・地番、実測坪数、実測歩(反則)数、所有者名が記されています。

表にあげられている農地所有者は47人(「所有者不明」含む)居ますが、下のグラフから万平は円山村で2番目の、また善七は村で4番目の農地所有者であることが分かります。円山村の開拓と発展に尽くした上田家の足跡が、この地図に見られるような、村での土地所有状況に現れています。

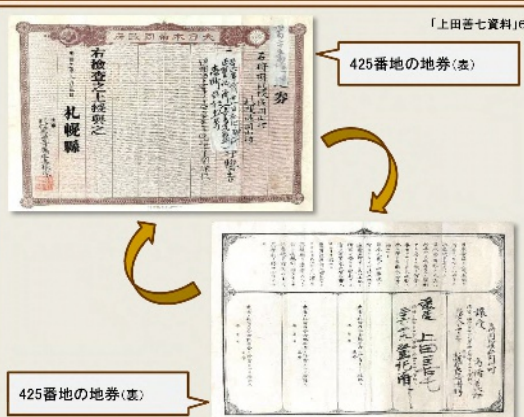


「石狩国札幌郡円山村私有地連綿図」に加筆 ▲

- は上田万平所有農地、は上田万平所有宅地、
- は上田善七所有農地、は上田善七所有宅地、
- は田中三次郎所有農地、は田中三次郎所有宅地、

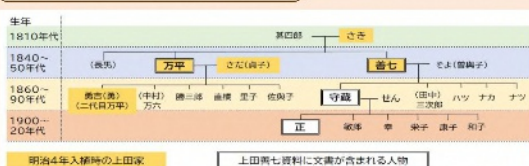
ただし、善七の所有する土地については、表中に地番が書かれていない土地が複数あり、それらについては地図中に場所を示していない。

地図右上・左上の土地所有一覧表をもとに作成した、明治37年現在の円山村農地所有者・所有面積のグラフ ▼



これは、明治37年時点で上田善七が所有していた土地のうち、畑425番地の地券です(「上田善七資料」6)。地券とは、土地の所有を公的に証明する書類です。元々は金野惣吉が所有する土地でしたが、明治18年7月に高橋善次郎(善七の義兄)が金野惣吉から譲り受け、さらに明治38年2月には善七が高橋善次郎から譲り受けています。万平・善七が村内の土地所有を徐々に増やしていき、やがて村内屈指の大地主になっていった様子がうかがえます。

上田家の家系図



『上田善七翁記』(「上田善七資料」263)や『徳行者上田萬平翁』などの資料を参考に作成した、上田万平・善七兄弟とその父母、万平家、善七家、善七の長男・守蔵家までの、上田家4代に渡る家系図です。

このうち、母さき、万平、善七、さだ(万平妻)、重吉(万平長男)の5人が、明治4年に盛岡から円山村へ入植した家族です。また二重線枠で囲んでいる万平・善七・守蔵・せん(守蔵妻)・正(守蔵長男)については、「上田善七資料」に関係文書が含まれています。それ以外の人物も、様々な刊行物に登場していることから、上田家の人々が代々名望家として活躍していたことが分かります。

2 地域の発展と上田家

円山地域は、山形県や岩手県からの入植者によって開かれ発展してきました。その功労者として挙げられるのが上田家の人々です。明治期は、上田万平・善七兄弟が、大正・昭和期にはその息子たちが村会議員や円山に属する団体の役員に多く名を連ねています。この章では、1節で円山地域が札幌市と合併するまでのような経緯をたどってきたか、上田家の

人々はどのような役割を担っていたのかを見ていきます。2節では、その中で上田家の人々が深く関わっていた事業3つをピックアップします。3節では、円山と関わりの深い札幌神社（現：北海道神宮）について、4節では明治39年の北海道物産共進会と大正2年の凶作について見ていき、円山地域と上田家の関係について追っていきます。

2-1 円山の開村から札幌市との合併まで

円山は明治3年に庚午三の村として開村し、その後円山村→藻岩村→円山町と名称が変更され昭和16年に札幌市と合併しました。上田家の人々は、明治4年に円山地域に移住して以降数多くの公職につき地域の発展に貢献

してきました。その様子を年表で追いながら写真や文書と併せて紹介します。

円山の変遷と上田家

年	円山略年表	上田家の人々(青字は上田善七に関する事項)
明治3	1870 酒井興(現:山形県庄内地方)より入植 「庚午三の村」開村 円山村と改称	
明治4	1871 若手県より農業移民入植 札幌神社(現:北海道神宮)創建	若手県盛岡加賀野より円山村43番地に移住
明治5	1872 札幌神社が官常小社となる。 札幌本庁大小区制施行	
明治7	1874 円山は第一次区第四小区	
明治8	1875	開拓使御雇／四等農業現術生徒 御用御差免／農業三等現術生徒 円山村副総代人:上田万平
明治9	1876	一等現術生徒
明治11	1878	円山村総代人:上田万平
明治12	1879 札幌本庁大小区制を廃止し郡区町村制へ。 円山村は当時の札幌区内の行政管轄下となる。 (円山村と山鼻村の戸長は兼任)	
明治17	1884 札幌区の行政管轄が札幌区内のみになり、円山は札幌外五郡役所の管轄となる。 山鼻村の山鼻小学校(南14西10)内に「山鼻村外一ヶ村戸長役場」が置かれる。 (役場は山鼻村と共用)	
明治23	1890 円山精穀会設立	上田万平・善七ほか有志によって設立
明治26	1893 山鼻小学校全焼 役場焼失により独立庁舎新築(南14西11)	
明治32	1899 札幌神社が官常小社に昇格	神楽方頭取
明治37	1904 円山町並組合設立	出納理事・組合長:上田万平
明治39	1906 二級村制施行。円山村と山鼻村が合併し藻岩村となる。 第一回村会議員選挙執行	村会議員に当選 北海道物産共進会地方委員 村会議員に当選
明治41	1908 藻岩村会議員選挙	村会議員に当選
明治43	1910 大正山鼻村の一部が札幌区へ編入 藻岩村役場移転	
明治44	1911 藻岩村会議員選挙	上田万平・善七村会議員に当選
明治45	1912 山鼻村並組合設立 藻岩村会議員選挙	監査役・理事:中村万六 村会議員に当選
大正2	1913 暴風雨が襲来し凶作となる。	
大正3	1914 円山消防組結成(山鼻)	円山に登山道を開く 組頭
大正4	1915 円山消防組結成(山鼻)	組頭
大正5	1916 藻岩村会議員選挙	村会議員に当選
大正6	1917 上田万平(初)死去 ※左側の万平が初	村会議員に当選
大正7	1918 藻岩村会議員選挙	村会議員に当選
大正8	1919 藻岩村並組合設立 円山消防組が公立となる。	組合長:上田万平
大正9	1920 藻岩村会議員選挙	村会議員に当選
大正11	1922 藻岩村会議員選挙	村会議員に当選
大正12	1923 路面電車が円山公園まで開通	
大正13	1924 藻岩村会議員選挙	村会議員に当選
昭和3	1928 藻岩村会議員選挙	上田万平、上田勝三郎当選
昭和6	1931 藻岩村一級村制施行。 一級村制施行に伴う村会議員選挙	上田勝三郎、上田万平、田中三次郎当選
昭和7	1932 町制施行。藻岩村を円山町に改称	死去
昭和14	1939 円山町町会議員選挙	上田守義、田中三次郎、上田万平、上田勝三郎当選
昭和16	1941 円山町、札幌市と合併	

【札幌市との合併】
昭和16年4月1日に札幌市と円山町は合併しました。円山町議会で市町合併臨時調査委員が議員から9名選定され上田万平も選ばれました。

左の文書は、北海道庁から出された合併に関する通知と合併の告示です。円山町を廃止し札幌市に編入すると書かれています。
右の文書は「札幌市に円山町合併に関する覚書」です。「札幌市と円山町合併／上八市八左記事項／覚書二部ムルノス」とあり17の事項が記述されています。円山町有給委員の合併後の待遇についてや円山町内に学校を新設、円山町公会堂の存続などが挙げられています。
【昭和16年 円山町合併関係文書】

【農業現術生徒】
上田善七は明治7～9年に農業現術生徒になっていました。農業現術生徒とは、開拓使が外国の農業技術を取り入れ北海道の開拓に役立てるため技術者の養成を行っていた制度です。農業現術生徒は成績によって等級が分かれおり、善七は1等上の等級である一等現術生徒にもなっています。
「上田善七資料」119、121、122

【札幌郡藻岩村役場】
明治23年におかれた村役場は、山鼻村にあったので、山鼻村の一部札幌区編入に伴い円山村に移転しました。
「札幌緑地史料館」(別冊第一)
北海道大学附属図書館蔵

【藻岩村会議員に当選】
上田善七は何度も藻岩村会議員に当選しており、村民からの人望も厚かったことがうかがえます。文書は村会議員の当選通知です。
「上田善七資料」15、16、18、20、21、22、23

【円山登山道】
上田万平・善七兄弟が円山山頂までの登山道を開きました。同時に善七は、成山山新築寺の住持と相談し西国の八十八ヶ所にちなみ、88体の観音像を置きました。現在でも円山八十八ヶ所入口からの登山ルートは、手堅なハイキングコースとして親しまれています。
「円山八十八ヶ所」

【円山町に名称変更】
昭和13年4月15日、藻岩村は円山町になりました。明治39年に藻岩村となって以来、32年ぶりに自治体名称として、円山の名前がつけられました。藻岩ではなく円山とした理由として、運物名や団体名において藻岩が使われることはほとんどなく、円山の名称のほうが一般的であることが挙げられています。

右の地図の黄色部が円山町域です。円山、山鼻、八重別、白川の4つの字があり、藻岩村大字円山村は円山町大字円山となりました。
「昭和13年版 許可認可関係書類 円山町、30巻」



2 地域の発展と上田家

2-2 上田家関わった事業

上田家の人々は村会議員など公職のほかにも多くの事業に携わり円山の発展に寄与してきました。そのなかから、上田万平が藻岩村蔬菜組合の理事長を務めた「円山朝市」、上田善七が組頭を務めた「円山消防組」、飢

饉等の不時に備えて万平・善七兄弟が尽力した「貯蓄事業」の3つに焦点を当てて紹介します。

円山朝市

円山で開かれていた朝市は上田万平が農産物を1か所でまとめて販売しようと呼びかけたことから、現在の札幌中心部のあたりに始まりました。その後は、移転を繰り返しながら大正7年には上田万平(2代目)を理事長とした藻岩村蔬菜組合が設立されるなど発展してきました。

円山朝市の移転

年代	移転の経緯	移転先
明治20年代①	上田万平の呼びかけにより朝市が始まる。	南1西10
明治24年②	路面工事によるため移転	南1西15
年代不明③	札幌市街地の拡張により西へ移転	南1西20
年代不明④	札幌市街地の拡張により西へ移転	南1西24
大正7年⑤	南道沿いであり交通に支障をきたすため移転	南1～北1西25
大正11年⑥	路面工事により円山公園まで延長のため移転	大正～北1西24

朝市は札幌の発展に伴い交通事情等から何度も移転してきました。現在の地図と照らし合わせてみると、大通公園の付近で始まった朝市が円山公園駅付近まで来ており、西に動いていたことがよくわかります。



藻岩村蔬菜組合の設立当時の役員名簿です。上田家の入りが複数名を連ねています。

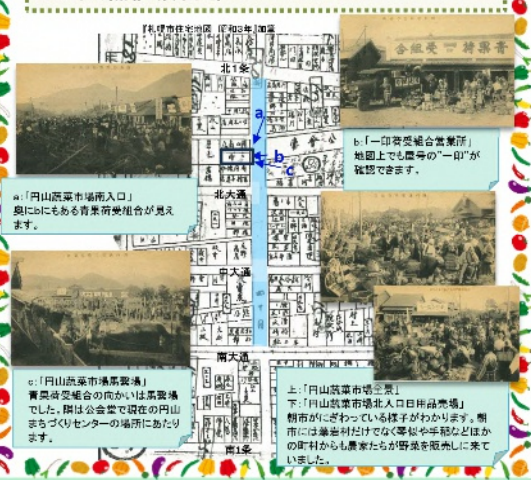


昭和11年(1936年)の「市営蔬菜市場」の地図です。円山朝市の場所がわかります。

昭和11年(1936年)の「市営蔬菜市場」の地図です。円山朝市の場所がわかります。

円山朝市の様子(大正京～昭和初期頃)

大通～北1条西24丁目まで朝市が行われていた様子です。当時の住所表記だと、「藻岩村大字円山村4丁目路線西ニシテ南大通道路及北1条路線ノ間」です。この場所を当時の地図で見ると以下の水色部分になります。この通りは朝市通りと呼ばれていました。朝市が行われた場所の広さは1,755坪で他に400坪の馬鞍場がありました。



円山消防組

円山消防組は大正4年に設立された私設の消防組織です。組頭の上田善七以下47名で組織され消防ポンプと火の見やぐらを設備していました。大正8年には公立となり、その後自動車ポンプやガソリンポンプを購入し、役場の横に庫車を設置する等、設備を拡充していきました。



- 図1: 消防組組頭上田善七
- 図2: 大正4年設立当時の円山消防組
奥に木製のやぐらが見えます。
左側の建物は藻岩村役場です。
- 図3: 昭和4年には鉄骨製のやぐらも新築されました。
- 図4: 公立円山消防組組頭の辞令
- 図5: 円山消防組機械部隊
当時の最新式の自動車ポンプを保有していました。

図1: 上田善七氏(1883年)の辞令(円山消防組組頭)と図2: 上田善七氏(1883年)の辞令(円山消防組組頭)と図3: 上田善七氏(1883年)の辞令(円山消防組組頭)と図4: 上田善七氏(1883年)の辞令(円山消防組組頭)と図5: 上田善七氏(1883年)の辞令(円山消防組組頭)と



【列伝 消防名鑑 創業十周年記念】

貯蓄事業

円山村では飢饉等の不測の事態に備えて貯蓄を行っていました。円山積穀会をはじめとし、3つの貯蓄に関する組合に上田家の人々が深く関わっていました。その組合について見ていきます。

円山積穀会

明治17～18年頃設立

上田万平・善七兄弟が「万一不幸にして凶作飢饉の際に際せば如何なる惨状を見るに至るやも測り難なし」と主張し、設立しました。大麦・小麦・粟を主に積穀し、不作等で困窮した際に食料や種子用に貸付を行ったほか、余裕分は現金化して救済貸付や村の共同事業資金に充てていました。円山の地勢耕作減少に伴い、大正5年に積穀制度を停止し解散しました。倉庫その他の財産は円山会が引き継ぎました。

円山会

円山の共有財産の維持管理を行う組織です。規約上は大正8年発足ですが、実質的には明治中期ごろから存在していました。初期は上田万平が世話係であり、正式発足の会長は上田万平(2代目)でした。

円山信信組合

明治44年設立

明治41年に発布された戊申詔書にある恩召しをもとに設立された組合です。円山貯蓄組合と似ており、こちらもお金を貯蓄する金融機関です。役員には上田善七もおり、監査役を務めました。藻岩村収入役であった中村万六(初代万平の末弟)は理事を務め金銭出納に関することは万六が行っていました。5年で解散し、第2回設立の際には善七が理事及び組合長に選ばれています。

明治44年1月24日北海道タイムズ「円山信信組合」1月21日に役場に創立総会が行われました。

円山貯蓄組合

明治37年設立

上田万平・善七兄弟が設立し、組合長に万平、出納理事には善七が選ばれました。この組合は麦ではなくお金を貯蓄する金融機関でした。当初から3年期限で設立され明治40年に解散しています。また、理事として好成績をおさめたとして善七は表彰を受けました。



戊申詔書「上田善七氏(1840)明治天皇によって発布された詔書です。日清戦争後の社会の乱れを正し、国民の奮闘を成め、一致団結することを諭しています。

2 地域の発展と上田家

2-4 物産共進会と大正2年の凶作

「物産共進会」とは、産業の振興を図るため、各地方の代表的な物産や技術を一堂に集めて展覧し、その優劣を品評する会です。北海道における物産共進会の開催は明治11年10月札幌で開かれた農業博覧会が最初でした。農産物の出品展示が中心で、審査を行い優秀な出品者に褒賞を与えました。

農業博覧会を前身として、明治39年9月10日から30日まで中島遊

園地（現：中島公園）で北海道物産共進会が盛大に開催されました。上田善七はこの物産共進会で地方委員に委嘱され、会期後の12月に感謝状が贈られています。（左下：「上田善七資料」88）また、大正2年に起きた北海道の凶作時には生活に困窮した人々のために寄付を行いました。明治39年当時の物産共進会の様子や、大正2年の凶作について当館の所蔵資料から紹介します。

北海道物産共進会（明治39年）

明治39年9月に開催された北海道物産共進会は、園田安富北海道庁長官の下、人口の増大と各種生産物価額の増大等、北海道経済が飛躍的な発展を遂げる中で行われ、総経費、出品数ともに過去に群を抜いて大規模なものになりました。共進会のために来札される各府県の特産品のため汽車連絡時刻表の配布が行われ、夜は会場で花火が打ち上げられる催しもありました。第1館の建築物は、北海道物産陳列場として永く本道産業奨励の一機関となることを期待され、会期後も利用されました。

開催期間中の来館者数は合計で14万人にのぼりました。（明治39年9月の札幌区の人口は80,884人）

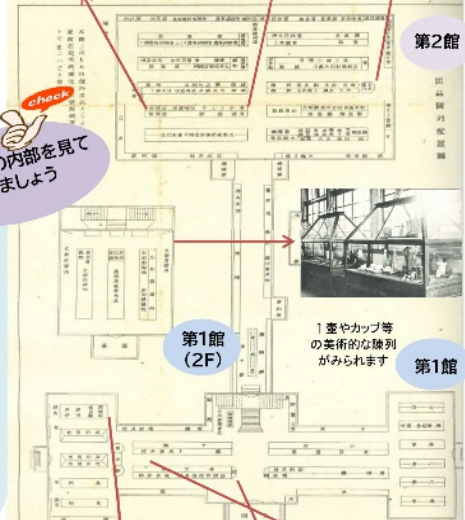


右から生糸の陳列、酒類の陳列、左、石炭の陳列



共進会の内部を見よう

右の図は第1館と第2館内部の出品物の配置図です。第1館は1階を大豆や小豆などの農産物出品と昆布や魚等の水産物出品の陳列場にて、2階では農商務省と各府県の出品の絹織物や陶器類が陳列されました。両館の間には多数の出品物を陳列するため廊下が設けられました。第2館では織物類や生糸、酒類、石炭等の鉱産物が陳列されました。ほかにも多くの建物があり、牛や馬等の出品のための牛馬舎も設けられ、北海道林業会からは道産の木材を使用した和洋折衷の模範家屋が出品されました。臨時の郵便局やピヤホール、福引の引換所（景品には時計、桐革靴があったそうです）等もあり、特に9月15日の記念日には多くの人で賑わいました。



①②共進会記念絵はがき③記念日に並ぶ人々④金賞受賞の馬⑤正門より門前を望む⑥特別広告（小樽新聞）※他共進会内部写真：『北海道物産共進会事務及審査報告書』



「上田善七資料」88

北海道の凶作（大正2年）



『北海道凶作窮民状況写真画帖』、『北海道凶作救済会報告書』



大正時代の1円は現在の金の価格で換算すると約17,650円です。6円は約105,900円でした。

「上田善七資料」左：98、右：99

※金の値段をもとにした参考値。
大正6年の金1g1円36銭から計算（現在：約24,000円として計算）

大正2年は気温が著しく低下し、8月下旬における暴風雨及び9月中旬における例年よりも早い降霜は作物の生育を妨げ、未曾有の大凶作を引き起こしました。その状況は「平年に於いては僅に六十万石の産額ある水稲の如き僅かに石狩、胆振両国の一部に於いて三万石を収穫し辛うじて翌年の種を得たに過ぎなかった」と記されています。主に空知地方の水田地帯が被害を受け、札幌では手稲村と白石村が大きく被害を受けました。

道庁は、被害状況が甚大な地方には庁員を派遣し、罹災者の生活状況を調査しました。空知、室蘭、札幌の凶作地における罹災者の状況は「昨年は、二十石を収穫せしものは今年は一石の収穫無き」「木の実を拾い糞にして団子にするもすでにその実も食い尽くし今はキャベツの根を食用にする」「子どもの通学も停止」「家具一切を売却する」等大変な窮乏でした。

この窮乏に際し、広く篤志者の寄付を募り、本道官民が協力した救済会を組織することが決定され、大正2年12月15日をもって道庁内に北海道凶作救済会が設けられました。弁当や学用品を持つことができず休学せざるを得ない児童には救済会より食料や筆、紙等が支給されました。また、生業を設け、生活の資金を得てもらうと道路の改良工事を請け負わせました。

上田善七と守蔵は寄付を行い、大正3年に感謝状が贈られています。（善七は深谷村の有志と共に寄付を行ったようです）全道的に救済活動は行われましたが、この凶作の評判が道外に大きく伝わったため、本道の雇工業者の送荷や供給に対して不安を抱かれ送荷の減少を招き、札幌の経済に深刻な影響を及ぼしました。

3 上田家と教育

第3章では、主に上田家の教育への関わりを紹介しします。上田万平・善七の兄弟は、教育活動に熱心に取り組んでいました。1節では、万平・善七兄弟やその息子たちが、設立や運営に携わった円山小学校について紹介

します。2節では、善七の息子で、教師として全道各地を転動し、校長まで勤めた上田守蔵について紹介しします。

3-1 円山小学校と上田家

円山小学校は、明治8年に村の有志によって設立された円山教育所を源流とする学校で、令和7年に150周年を迎えました。円山小学校の設立や運営には、上田家との深い関わりがありました。

本節では円山小学校の設立から学校維持のための活動と、円山小学校における上田善七の活動、そのほかの上田家と円山小学校に関する活動について紹介しします。

円山の教育のはじまり

明治8年、上田万平は三関菊松、阿部仁太郎など村の有志と協力して円山教育所を設立しました。最初の教員は、青森から迎え入れた萩野景範先生であり、生徒は10人ほどだったようです。学校ができたころは、農作業を優先するために生徒を働かせない家が多くありました。そのため、学校世話係という役職が置かれ、先生と一緒に各家庭を回り、学校へ通わせるよう説得していたそうです。学校世話係を最初に任命されたのが三関菊松、阿部仁太郎の兩人で、明治16年に上田善七と土田金次郎に交代するまで務めました。円山教育所は、明治10年に円山10番地（現在の海5条西25丁目）から現在地（北1条西25丁目）へ移転しました。その後、生徒数の増加に伴って敷地の拡張や校舎の増築を繰り返し、現在の円山小学校へと続いています。

長男の上田萬（後に「上田万平」を襲名）は、最初の生徒の一人。



上田万平

荒廃していた萩野景範先生のお墓を改築することを企画。



上田万平(2代目)

『円山尋常高等小学校 創立50周年記念誌』



明治36年頃の生徒と学校関係者の写真。後に元える校舎は明治19年に建てられたもの。終戦後約40坪の二階建ての校舎で、大正11年に建て替えられるまで使用されました。

円山小学校の危機

明治15年、学校に対する補助金が廃止されました。これを受けて、円山村では学校を続けるかどうかの話し合いの場が設けられました。補助金がないと学校の運営が困難であったためです。上田善七は、その話し合いの場で学校の重要性を強く訴え、円山村では学校を続けるという方向で話がまとまりました。（『上田善七翁記』には、当時の話し合いの様子が記されています。）善七は、学校存続派であったこともあり、明治16年に学校世話係の一人に選ばれます。しかし、善七が学校世話係に就任した時点では、学校を安定的に運営していく方法は未定でした。そのため、円山小学校を運営する資金をどのように確保するか検討する必要がありました。そこで善七は、当時札幌県（北海道庁の前身組織）が実施していた学田の無償付与を受けることを決めます。この学田の仕組みは、札幌県が農地を学校に与え（与えられた農地を「学田」と呼ぶ）、各学校がその農地を耕し作物を育て、収穫した作物を売ることによって学校運営資金を確保させるというものでした。善七は何度も役所に通って申請をした結果、手稲村西野（現在の西区西野）に30万坪の学田が付与されました。善七は学田の開発に力を入れ、率先して小作人の募集や指導を行い、その結果、円山小学校の運営費を補助するだけの収入を得ることができるようになったそうです。学田の開墾に携わった小作人たちは、上田善七の尽力を称えて円山学田記念碑を建立しました。（学田記念碑の詳細については第4章の「上田家の社会貢献活動」を参照）

「今後如何なる者でも文字を知らない者は非常に困るものであるから円山の学校を廃することが出来ないものである」



上田善七の主張（『上田善七翁記』より）

明治16年に善七とともに学校世話係に選ばれ、学田村長に尽力しました。明治39年薄岩村に議会が置かれると、善七とともに第1期の村会議員に選ばれています。

「村中が貧乏になっているのも文字も知らない当時の事も知らないから（中略）金持になるのも貧乏になるのも皆学校一つにあると思う」

昭和3年頃の円山学田



『上田善七翁記』265

円山学田では、水田が確保されました。水田以外にも畑が作られていて、そばや粟穂が作られていたようです。学田では、開墾を奨励するために、小作料（土地使用料）がほかの土地よりも安く設定されていました。一例として、大正5年における学田地の小作料（畑作地）は、一反（約1,000㎡）当たり50銭（100銭＝1円）とされました。（当時の札幌の小作料（畑作地）の相場は一反当たり3～6円でした。）昭和15年に小作人に売却され、学田としての役割を終えました。

土田金次郎



円山小学校と善七

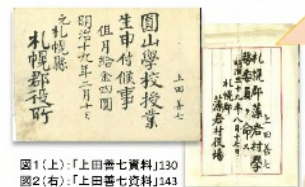


図1（上）：『上田善七翁記』130
図2（右）：『上田善七翁記』143

円山小学校は、生徒数の増加に伴ってたびたび校舎の増築を行っています。上田善七は、いくつかの増築の際に建築委員などの要職を務めました。図3が大正15年の小学校増築の際に上田善七が要職を務めたことに対する感謝状。図4は大正11年に新築された円山小学校の写真です。（撮影年は大正14年頃）大正15年の増築時には、教室の増築と運動場の拡張工事が行われました。

上田善七は明治19年に円山小学校の校長に任じられました。図1は校長に任命された時の辞令です。校長とは、教師を補助する役職で、時には授業も担当することもあったようです。また、明治33年に円山小学校の学務委員に任命され、その後も長く学務委員を務めました。学務委員とは、区域内の教育に関する方針を定めたり、学校の運営を助ける仕事でした。図2は明治39年に厚岩村の学務委員に任命された時の辞令です。

図3（左）：『上田善七翁記』105
図4（下）：『円山尋常高等小学校 創立50周年記念誌』



円山小学校保護者会

大正12年、円山小学校に保護者会（現在のPTAに当たる組織）が設置され、初代会長には上田万平の長男の上田万平（2代目）が就任し、理事には次男の中村万六、幹事には三男の上田勝三郎が就任しました。昭和10年に行われた円山小学校開校六十周年記念の際には、その功績が称えられ、表彰が実施されています。



昭和10年10月11日 北海タイムス

左の新聞記事は、円山小学校開校六十周年記念を伝える記事です。表彰者は3人のほかに、当時の円山小学校校長で、算数教育の研究者としても有名な渡辺永助なども表彰されています。表彰者の一人である中村万六は、明治39年と44年の円山小学校校舎増築時に、学校用地となる土地の売却に応じるなど、保護者会以外でも関わりがありました。

3 上田家と教育

3-2 教育者上田守蔵

上田守蔵は明治12年、上田善七の長男として生まれました。守蔵は教育に熱心な父善七の影響を受けたのか、長じて教師となり、明治33年から留萌郡留萌尋常高等小学校の訓導（小学校の正教員を指す言葉。第二次世界大戦終了時まで使用された）に着任したことを皮切りに、全道4つの学校で教師・校長を務

めました。昭和7年に退職した後は円山に帰り、岸村会議員や円山小学校保護者会副会長などを務めるなど、精力的に活動していたようです。本誌では守蔵の教師としての活動を紹介します。

上田守蔵の教育者としてのあゆみ



上田守蔵

教員免許



「上田善七資料」135



「上田善七資料」140

上田守蔵は明治29年北海道尋常師範学校（現：北海道教育大学札幌分校）に入学しました。明治33年には、本科正教員（全教科を筆で教えることができる教師資格のこと。旧制の科目のみを教えることができる専科正教員という資格もあった）の小学校教員免許を取得します。最初の赴任先は留萌尋常高等小学校でした。

その後明治35年に新設された広島高等師範学校（中等教育機関の教員を養成する学校。明治35年時点では東京高等師範学校と広島2校のみ）へ進学し、博物学（現在の生物と地学を合わせたような教科）の免許を取得します。

取得後に配属された北海道庁立札幌高等女学校では、理科を指導し、その後は旭川高等女学校、倶知安中学校の校長を務めました。

上田守蔵の赴任地

国土地理院タイル（白地図）に赴任地を追記して掲載



- 上田守蔵の赴任地 ①は地位
①北海道留萌郡留萌尋常高等小学校【訓導】
（現：留萌市立留萌小学校）
②北海道庁立札幌高等女学校【教諭】
（現：北海道札幌北高等女学校）
③北海道庁立旭川女学校【校長】
（現：北海道旭川西高等女学校）
④北海道庁立倶知安中学校【校長】
（現：北海道倶知安高等学校）

異動時の辞令

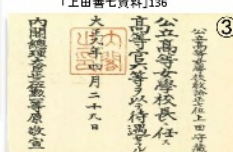
異動時の辞令の③と④には赴任先が書かれていないため、校長になったことばかりですが、どの学校かはわかりません。このような場合、別の資料から推察する必要があります。今回赴任先の確認に使用したのは、北海道立札幌高等女学校同窓会が発行した「記念帖」です。ここに上田守蔵が文章を寄稿しており、その文章内に赴任先と赴任年が記載されています。



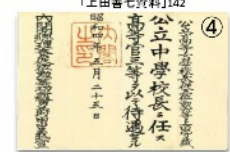
「上田善七資料」136



「上田善七資料」142



「上田善七資料」156



「上田善七資料」166

札幌高等女学校時

北海道庁立札幌高等女学校は、明治35年に北海道内で最初の高等女学校として開校しました。守蔵は明治39年～大正9年の14年間勤務しています。

勤務歴の長さもあり、守蔵は教諭（当時は教諭先生の役職はなく、文字通り教師陣のリーダーのような役割）も務めていたようで、創立10周年の際には、教師陣の総代として祝辞を行っています。

また、理科教師であったためか学校園（植物の生態を学ぶといった目的で設置され、観察植物などを育てていた）の運営にも関わっていたようです。

北海道庁立札幌高等女学校
『東宮殿下行啓記念 上』



北海道庁立札幌高等女学校は、新学制によって北海道立札幌女子高等学校となり、昭和25年に男女共学の北海道立札幌北高等女学校となりました。

上田守蔵の主な活動

時計台は昭和25年に市立図書館として再オープンしてから、昭和42年に図書館が新築されるまで図書館として使用されました。



明治44年頃の時計台
『東宮殿下行啓記念 上』

守蔵は、当時北海道に存在した北海道教育会という団体に所属していました。その団体は、「北海道教育会附属図書館」という図書館を運営しており、守蔵は大正4年にこの図書館の図書調査委員（図書の新規購入を調査する委員）に選ばれています。

この北海道教育会附属図書館は、明治32年にオープンした図書館で、明治44年に時計台に移転しました。当時の札幌には4つの図書館があり、その中で唯一学校外にある図書館であったため、一般の利用者が多かったそうです。

その後昭和25年に市立図書館として再オープンしています。

図書調査委員

当時の教員に関する制度

学校の教員は基本的に判任官（はんにんかん）待遇でしたが、一部の教員には委任官待遇が与えられていました。

この判任官と委任官は、任命者が異なっており、判任官は基本的に地方官が、委任官は政府が任命を出していました。（委任官の上には現任官という身分もあり、委任官以上になると皇族に昇格する資格があったようです。）

上田守蔵は、明治43年に委任官待遇になりました。その時の辞令が下の図Aです。これを見ると、任命者が当時の総理大臣である桂太郎から出されていることがわかります。また、上田守蔵が委任官待遇以降の辞令（辞令③、④参照）も、当時の総理大臣から出されていることがわかります。

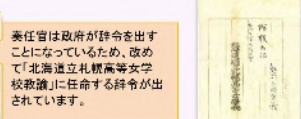
図Bは「除服出仕」の辞令です。除服とは、喪が明けることを指す言葉で、現在でも「忌引」があるように、この時代にも親族が亡くなった際に喪に服する習慣が存在しました。

守蔵の母親である上田そよは、大正3年7月17日に亡くなっており、この時の喪に関するものであると推測されます。

当時の「服忌令」（ふっきれい）によると、親の死による忌の期間は「50日」と定められていますが、同時に業務に支障がある場合はその期間を短縮することができるとも定められていました。この辞令は大正3年7月24日に出されており、守蔵は一週間で職務に復帰した（喪が明けた扱い）ようです。



図A「上田善七資料」145



図B「上田善七資料」147

委任官は政府が任命を出すことになっているため、改めて「北海道立札幌高等女学校教諭」に任命する辞令が出されています。

4 上田家の社会貢献活動

上田家の人々は公職に就くだけでなく、様々な団体に所属し寄付などの社会貢献活動を行いました。その結果、上田万平は大正3年に藍綬褒章を、上田善七は大正13年に紺綬褒章を授与されました。また、複数の石碑や胸像が建立されました。第4章では、「上田善七の寄付や上田家の人々の所属団体」と「上田万平・善七の社会貢献活動の功績」について紹介します。

像が建立されました。第4章では、「上田善七の寄付や上田家の人々の所属団体」と「上田万平・善七の社会貢献活動の功績」について紹介します。

4-1 上田善七の寄付や上田家の人々の所属団体

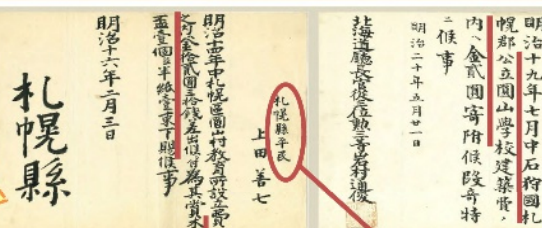
「上田善七資料」には多数の感謝状が含まれており、上田善七は様々な団体に寄付していたことがわかります。また、辞令や囑託状から上田家の人々が複数の団体に所属して社会貢献活動をしていたことがわかります。

ここでは実際に資料を眺めながら、上田家の人々の活動を読み解いていきましょう。

上田善七の寄付

明治16年2月3日

これは明治16年2月3日付の下賜状です。明治15年の開拓使の廃止に伴い函館、札幌、根室の三県が置かれていた時代の物です。下賜とは、天皇や国が功労者に対して物品を授与することを言います。この下賜状は善七が教育所設立費用として金十二円三十銭を寄付したことに對して、札幌県が木盃1個と半紙1束をお礼として授与したことが記されています。

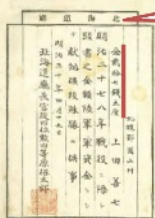


「上田善七資料」79 下賜状(寄付)

明治20年5月21日

これは公立円山学校を建築する際に善七が金二円を寄付したことに對する北海道庁からの感謝状です。

「上田善七資料」80 感謝状(寄付)

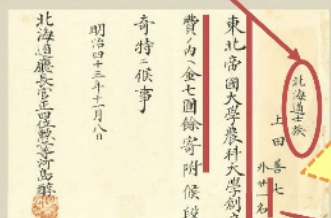


明治時代では横書きの文字は右から左に読んでいたことがわかりますね。

明治30年4月19日

これは明治27年28年戦役(日露戦争)の際に善七が金二十七銭五厘を陸軍に献金したことに對する北海道庁からの感謝状です。

「上田善七資料」81 感謝状(寄付)



「上田善七資料」92 感謝状(寄付)

明治43年11月8日

これは東北帝国大学農科大学(北海道大学)設立費用として善七が金七円を寄付したことに對する北海道庁からの感謝状です。明治16年の下賜状では善七の身分は「札幌県平民」でしたが、この感謝状の時点(明治43年11月8日)では「北海道士族」に変わっています。また、善七の名前の左側に「外二十一名」と記されており、善七以外にも寄付した人がいたことがわかります。

これで「二十一名」と読みます。

所属団体

上田善七資料には上田家の人々が所属した複数の団体の辞令や囑託状が存在します。主に万平・善七・万平(2代目)・守蔵・せん(5名)が所属して活躍した団体を下記の表にまとめました。ここでは、その中でも善七と守蔵が所属した日本赤十字社の資料について詳しく紹介します。

所属団体	所属者	金額	役職
北海道物産共進会	善七	金百五十円	服地料
北海道農産共進会	善七		
円山町畜産組合	善七		
官幣大社札幌神社	善七		
北海道尚武会	善七		
北海道作牧済会	善七		
円山寺	善七		
立憲政友会北海道支部	善七		
大本山総持寺町建事務所	善七		
北海道商會	善七		
日本赤十字社	善七・守蔵	金百五十円	服地料
南部同盟会	万平・善七・万平(2代目)		
帝國軍人後援会	守蔵		
日本海員救済会	守蔵		
北海道教育会	守蔵		
湯川村後援会	守蔵		
岡山町後援会	守蔵		
岡山町後援会	守蔵		
愛国婦人会	守蔵・せん		

上田家の人々が所属していた団体の一覧(一部抜粋)

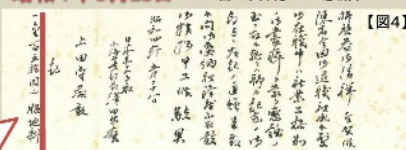
日本赤十字社(善七・守蔵)

【図1】

大正4年
11月14日

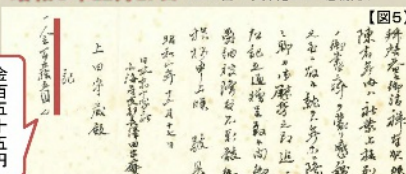
「上田善七資料」151
辞令

昭和4年5月28日「上田善七資料」107 感謝状



【図4】

昭和6年12月17日「上田善七資料」108 感謝状



【図5】

【図6】

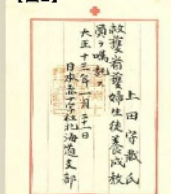
昭和11年
6月12日

「上田善七資料」172
辞令



大正13年1月21日 昭和4年5月28日

【図2】



「上田善七資料」195
囑託状

【図3】



「上田善七資料」198
解任状 他

日本赤十字社とは、赤十字に関する諸条約の精神にのっとり、医療・救済・社会事業などを目的とする団体です。

大正4年11月14日付の辞令【図1】では善七が正社員(正会員)になったことが記されています。

入正13年1月21日付の囑託状【図2】では守蔵が日本赤十字社の救済看護婦生徒養成教員として囑託されたことが記されています。その後、昭和4年5月28日付の解任状【図3】でこの職が解任されており、同日付の感謝状【図4】では服地料として金百五十円を贈呈されたことが記されています。この他に、昭和6年12月17日付の感謝状【図5】もあり、こちらには、「退職の際、感謝と慰労を兼ねて金百五十円を贈呈する」という内容が記されています。

守蔵はその後、善七と同様に日本赤十字社の正社員(正会員)になったことが昭和11年6月12日付の辞令【図6】からわかります。

4 上田家の社会貢献活動

4-2 上田万平・善七の社会貢献活動の功績

上田万平・善七は様々な公職だけでなく社会貢献活動にも取り組みました。その結果、複数の石碑や胸像が建てられました。それらの一部は現在

も見る事ができます。本節では二人の顕彰について解説していきます。石碑をとおして善七と万平の功績をたどっていきましょう。

上田善七のために建てられた石碑



「上田善七資料」
265

円山学田記念碑

学田者確立學事之基礎也
務委員上田善七君首唱設
圓山學田之議頻奔走盡力
民結經營最勤苦乃誘導
有七年荒余化成長田者
餘町於是學事益盛風俗
農皆拙口領君之功德於
春建一碑以傳其功績於
朽云爾
荒瀬 遠流書

「上田善七資料」246 圓山學田記念碑(碑文)

【建立年】明治43年9月
【所在地】札幌市西区西野6条3丁目昭和会館前庭
この碑は円山学田の開墾の成功と世話役として力を尽くした善七の功績を記念して建立されました。
上田善七資料に碑文の資料があります。この碑文には、善七が円山に学田を設立することを提唱し、その実現のために力を尽くしたことが記載されています。学田が完成すると移民を導き入れて、経営に努めたとも記されています。それから27年の歳月が流れる間に、荒野は100町歩(約100ヘクタール)あまりの立派な良田へと変わりました。その結果、学校の運営はますます盛んになり、地域の人々の暮らしもより一層良くなったため、その功績を永遠に伝えるために碑を建立したと記載されています。

大正13年に紺綬褒章をいただきました。



「上田善七資料」265
上田善七翁記

善徳翁碑

縦書きで「滝ノ沢功労者善徳翁碑」と記されています。



『円山百年史』

【建立年】大正12年
【所在地】札幌市中央区円山西町6丁目円山西神社境内
滝ノ沢(円山西町)の善七の所有地に滝があり、景色がよいと褒められたため、善七はそこを「不動の滝」と名付け、通路を整え、不動尊像を安置して参詣者が利用できるようにしました。
善七は同じく滝ノ沢に所有する土地を神社敷地として同地区に寄付し、これが現在の円山西神社となっています。善七のこの功績を記念して滝ノ沢地区では、「善徳翁碑」を建立し、現在円山西町神社境内に残されています。

横書きで右から「善徳翁」と記されています。



「善徳翁」碑

【建立年】昭和3年8月
【所在地】札幌市中央区北1条西23丁目円山公会堂(旧:円山会館)前庭
この碑は善七の功績を讃え村の人々が建立した物です。北海道札幌師範学校長の柴垣則義の碑文が刻まれています。
碑文には善七の出生から円山村に移住したこと、その後、円山学校の世話係、学務委員、村会議員、消防組頭(消防隊長)などの公職に就き、46年間にわたり地域社会に尽力したことが記載されており、その結果、善七が紺綬褒章を授与されたことが記されています。この碑は「円山開村記念碑」の右側にあります。

【図1】の「善徳翁」碑の写真は、昭和52年に発行された『円山百年史』掲載の物です。【図2】の建立時の「善徳翁」碑と形が異なっています。このことから、途中で何かしらの理由で碑の角を削った(あるいは加工した)ことが推測できます。なお、現在の見だ目は碑文の色が剥けて右の色一色の状態に変化しています。

上田万平のために建てられた石碑・胸像



『円山百年史』

上田一徳翁之碑

【建立年】明治43年5月
【所在地】大通西20丁目(明治43年5月)→中央区伏見2丁目札幌伏見神社境内に移設
深岩村が万平の徳を讃えて建立した物です。この碑は、当初、中央区大通西20丁目に建立されましたが、その後、札幌伏見神社境内に移設されました。

上田万平胸像

大正3年に藍綬褒章をいただきました。



『円山百年史』

【建立年】昭和3年8月
【所在地】札幌市中央区北1条西23丁目円山公会堂(旧:円山会館)前庭
この胸像は昭和3年に、万平の遺徳をしのんで建立した物です。昭和18年7月に太平洋戦争のため供出することになり現存していません。

円山公会堂に集められた石碑など



円山開村記念碑

【建立年】明治23年5月
【所在地】円山小学校前庭(明治23年5月)→大通西20丁目(大正4年)→札幌市中央区北1条西23丁目円山公会堂(旧:円山会館)前庭(昭和3年8月)に移設
円山村の開村20周年を記念して建立されました。善七の「善徳翁」碑の左側に東向きに建てています。



「円山公会堂前の胸像と記念碑」

「円山開村記念碑」(右)と「善徳翁」碑(中央)と、「上田万平胸像」(左)が円山公会堂に集められて昭和3年8月31日に深岩村の御大典記念事業(昭和天皇の即位式典を記念して、各地で実施された様々な事業の総称)として除幕式と開村功労者表彰式が行われました。

★印が付いている写真は「円山公会堂前の胸像と記念碑」出典